

Just Now

先生、もっと英語を使って！

Matthew de Wilde

(アイエック・コンサルタント／東京都荒川区 ALT)

大谷桂子(訳)

最近の小学校での一コマ

あれ、西先生は？いつものように5年生の教室に入ったが、一緒に Team-Teaching をするはずの担任の先生がいない。休憩時間にミーティングをしたばかりで、どこかにいるはずなのに。遅れて来るなんて先生らしくないな。

「マッシュューセンセイ、グッドモーニング」

子どもたちの声にハッと我に返った。

“Yes, good morning, good morning!” 26 人の目が一斉にこちらを見ている。

“Where’s Mr Nishi?” 手を広げて尋ねてみた。

「ノットヒア、ノットヒア」子どもたちは早く授業に入りたくてしかたがない。

“Not here? Where is he? He has gone home?”

「ホーム、ホーム！」子どもたちはクスクスと笑っている。

爆笑しながらさらに別の子どもたちも、「フィーバー！」「ヘッデイク！」などと言っている。ああ、なるほど！知っている英語を使ってみたいんだな。やっと状況が飲み込めた。西先生はさっきはあんなに元気だったのだから。

「ホスピタル！」前から3列めの子どもが、ニヤツとした。

そこで心配そうなふりをして、“The hospital?”
“Oh, I see. Mr Nishi has a fever and a headache, so he’s gone to the hospital.” 会話を続けようところらも必死になる。

「ベビー！」お腹の上で大きな輪を描いてひとりが答えた。

“A BABY?” 私の演技も高まる。

“A baby!! Mr Nishi is in hospital having a baby??”

ついに、子どもたちから歓喜の声が上がった。

“Well that’s WONDERFUL news!” こちらも乗って両手で拍手を送った。

“When Mr Nishi comes back, we must tell him ‘Congratulations!’”

こうして新しい表現、“Congratulations.” を練習し、西先生が現れるのを心待ちにしていたのであった。

私はこの7年間小学校の英語教育に携わってきた。ALTとして、また最近ではアドバイザーとして小学校の担任の先生の英語指導のお手伝いをしている。西先生の遅刻という出来事に、当惑するどころか、子どもたちが英語を使う絶好のチャンスになったと私は大変うれしく思った。彼らがこの時とばかりに、習った英語を使おうとした瞬間だったのである。

私の仕事は小学校での英語活動のお手伝いだが、時々中学校の授業を見たり、中学校担当の同僚のALTの話を聞く中で、小学校で行われていることが、中学校でも応用できないだろうか、とよく考える。以下、私なりの提案をしてみたい。

英語を意識的に使う環境を作る

小学校でも中学校でも英語を教える先生は、授業の中で子どもたちが英語を使う機会を意図的に作り出したいと考えている。例えば、プリントを1枚少なく配ってみる。子どもたちは“Can I have…?”という表現を使わざるを得ない。あるいは、職員室に入って来ようとする子どもに気づかないふりをしてドアの前に立ってみる。子どもたちは“Excuse

me.”を使えるようになる。また、教室名を英語で勉強した後で廊下ですれ違いざまに、どこへ行くのと尋ねてみる。子どもたちが習った教室名を英語で言う機会になる。こういったことを繰り返し体験することで、子どもたちは、実際に英語を使わなければならない機会に、積極的に飛びつくようになるだろう。冒頭で紹介した一コマを例にとれば、子どもたちがこれまでに生きた英語を使い、伝わったという達成感を味わってきたからこそ、西先生の突然の遅刻が、彼らの英語で何かを表現してみようという動機付けとなったのだと私は信じている。

小学校には多いのだが、中学校でも生徒に英語での対話の機会を与えるのはALTの役目と考えている先生に時々出会う。しかし教師が英語を使わずに、どうして生徒が使えるようになるだろう。英語を話す機会を作る役割はネイティブか否かに関わらず、英語教育に携わる全教師が担うものだと思う。ALTが学校にいる時間は限られているし、1人の力よりも2人の力のほうが大きいはずだ。英語の先生が、もっと生徒と生きた英語を使えば、それは生徒たちが英語を使う機会を増やすばかりでなく、「日本人でも英語で対話ができる」という前向きなメッセージになると思う。T-Tの環境下では、教師同士の対話や教師と生徒との対話が、生徒の英語力に直接反映することを意識したい。

十分な準備と意識

では、どうしたら日本語の少ない英語主体の授業が進められるだろうか。授業の準備にその答えがあると思う。「授業中に何をいつ言うか、なぜ言うのか、を慎重に考える」「アクティビティの指示を事前に英語で考えておく」「ALTの英語や自分の英語さえも日本語に直してしまうことがある場合は、なぜそうしてしまうのかALTと話し合って理由を探る」「文法の説明もできるだけ英語を使う方法を考える」「授業中どのように対話を図るべきかを常に意識する」——私が現在一緒に英語の授業を行っている小学校の先生方は、自分の知っている英語を精一杯使って、日本語なしで英語の授業をこなしているが、

それは上に挙げたようなことを心がけながら、十分な準備をしているからだ。「十分な準備と意識。」これを実践することで教室で使う日本語の頻度を減らし、純粋な英語のコミュニケーション環境を作ることができるのだと思う。

例えばひとつの方法として、教室外でも気軽に生徒と英語でコミュニケーションをとるようにしてみたらどうだろうか。この場合はあまり準備などはいらない。廊下ですれ違った時に簡単な“Good morning.”や“How was your weekend?”から始めてはどうか。あるいは“Hey, Jun! Did you get a haircut? It looks very nice.”“Good morning, Mari. Oh-uh, do you have a cold? Oh, that’s too bad.”など。これらは現在私が教えているフレーズである。

待つこととタイミングが大切

英語でのコミュニケーション能力向上に大切なのは、十分に時間をかけることだと思う。英語を使う機会をどんなに作っても、生徒がいつもうまく反応するとは限らない。何年勉強していても、廊下で“How are you?”と聞かれて躊躇したり答えられなかったり、英語でのコミュニケーションの準備ができていない生徒もいるだろう。そんな時、すぐに助け舟を出し、英語を日本語に直したり、英語の答えまでも示してしまうことはよくある。でも焦りは禁物。今話せなくても、話す機会を常に与え続けてほしい。彼らはいつか話せるようになるはずだから。

また英語を使うタイミングを上手に計るように意識することも大切だ。例えば、昼食のあと、“How was your lunch?”の方が“What TV program do you like?”よりも自然だ。場面にふさわしい英語を使う好機を失わないことも、英語でのコミュニケーションの成功への鍵だと思う。

担任の先生の遅刻も、子どもたちにとっては習った英語を使える素晴らしい機会となった。そのように、教室内に限らず生活のあらゆる場面で、さまざまな機会をとらえて生徒と英語でのコミュニケーションを図るように工夫してはどうだろうか。